



## 「最先端LEDディスプレイとバーチャルプロダクションの可能性」パネルディスカッションから

### ● 4社が発表したLEDの技術進化

11月15日にINTER BEE CREATIVEオープンステージで「海外最先端LEDディスプレイと日本のバーチャルプロダクション制作」と題したパネルディスカッションが行われた。MC（進行役）は、フリージャーナリストの川田宏之とポストプロダクション スーパーバイザの森 俊文が担当した。登壇者は高須誠一氏（Absen Japan副社長）、谷川真也氏（アークベンチャーズCOO）、梅村 誠氏（シリコンコア・テクノロジー日本法人代表）、単 振鵬氏（奥拓電子日本代表取締役）の4名で、それぞれバーチャルプロダクション向けの大型LEDディスプレイを販売している立場から意見を述べた。

各社の紹介と導入実績の紹介の後、パネル開発に必要なポイントについての話があった。

まず、大規模なバーチャルプロダクションスタジオでは270°から360°の全周型のスクリーンが設置されるが、天井面も環境光用のLEDパネルで塞いでしまうため、放熱の問題が出てくる。熱対策がうまくできないと、パネルが変形したり、色が変わったりしてしまうなどの影響が出てくる。また、XR（フレームエクステンション）ステージでは床面にもLEDパネルを使用するが、こちらは人が上に乗ると、熱くて立ってられないという事態が発生する。そこで、消費電力を40%削減している商品も登場してきた。

バーチャルプロダクションでは、画面の再撮影が前提となるため、パネルの反射も問題になる。フラットやオーバルのスクリーンでは照明の反射が発生し、全周型のスクリー

ンでは対面のスクリーンの光を反射することで画像のコントラストが低下する。このため、反射率が5%のパネルも開発されている。

また、各メーカーとも240Hzのフレーム周波数への対応が進んでおり、スタジオへの導入も盛んになってきている。60Hzフレーム周波数のカメラに対して、240Hzのスクリーンを用意することで、最大4台のカメラに異なった背景を同時に表示することができる。これを利用すると、4カメラのインカメラVFXないしはXRによる生放送が可能となる。また、ステレオ3Dでの背景表示も可能になるので、イベントなどでの利用価値も増えてくる。このようなLEDパネルメーカーならではの提案があった。

日本におけるバーチャルプロダクションは、設備コストやスタジオの使用料金が低いという理由で、LEDディスプレイに対する足踏みが続いている。しかし、海外ではカーボンニュートラルや働き方改革の手段として移行が加速している。さらに、海外のスタジオは狭くても床面積が200坪あり、最大で200坪の日本との格差が大きい。2024年にオープンするアメリカのスタジオは、面積が1,000㎡という巨大なLEDパネルが採用されているという。

### ● Inter BEEで大型LED製品の合同展示を期待

大型LEDディスプレイを販売している企業が日本には多数あるが、横の連携は少なく、4社の企業の代表が一同に集まりディスカッションを行う機会はInter BEEでも初めてだった。「LEDディスプレイ専門の展示会なども日本にはないので、これを機会に企業間での意見交換や情報交流の場ができれば何よりだと思ふ」（Absen高須氏）という声も上がった。

筆者（川田）は「中国の大型LEDの展示会などを取材しているが、常に300社以上が集まる盛況ぶりに驚いている。日本はInter BEEでLED関連企業が一番多く集まるが、それでも十数社余り。まずはInter BEEのコーナーとして大型LED製品の合同展示を期待したい。それに加え、大型LED映像協会のような組織づくりにつなげていければ、このパネルディスカッションが次につながるのではないだろうか」と呼び掛けた。

これを機に、日本でも大型映像のハードウェアやソリューション業界の交流が深まれば何よりである。

（寄稿：川田宏之・森 俊文）

